

『竹取物語』研究

―かぐや姫の罪と罰をめぐって―

岡崎 祥子

はじめに

誰もが知っている古典といえは、『竹取物語』である。竹取の翁とかぐや姫を中心に、難題求婚譚、申し子譚、そして羽衣説話に通じる物語の構成をなしているものである。中には、平安文化を象徴する「あはれ」を思わせる内容も含まれ、『源氏物語』において「物語出来きはじめの祖」と称されるに至っているのは周知のことである。

本研究においては、その『竹取物語』について、かぐや姫という存在に焦点をあて、考察している。具体的には、「かぐや姫が翁の元に現れ、再び月の世界へと帰っていくという流離の秘密を探り、かぐや姫が月の世界で犯した「罪」は何か、それに対する「罰」は何かについて考察する」という研究主題を設定し、『竹取物語』の世界観をもとにしながら研究を進めた。最終的には、かぐや姫の「罪」と「罰」について筆者自身の結論を導き出した。

一 「月」信仰

『竹取物語』における「月」は物語の構成上欠かすことのできないものである。物語において「月」が中心に据えられるのは、古代において「月」が信仰の対象とされていたからであると考えられる。はじめに古代の人々にとって「月」はどのような存在であったのかについてまとめたい。

「月」信仰に関しては、唐土舶来の漢籍による影響が大きい。中でも「月」についての記述がある漢籍としては、『白氏文集』が有名である。『白氏文集』における「月」の捉え方としては、二点挙げることができた。一点は、「月」を美しいものとして「めでる」捉え方、もう一点は、「月」を「忌む」捉え方である。前者については、現在にも残る「月見」の風習に代表される思想である。しかしながら、「月」を美しいとし、それを「めでる」思想には逆に人を狂気に導くという考え方も含んでいる。つまり、「月」は単に美しいというだけでなく、人々が惹きつけられる神秘的な魅力があるといえるのである。また、「月」の盈虚がそれを強調するものとなっている。「月」が満ち、そして欠けていく様子が、人間の生

死の繰り返しになぞらえられるようになったのである。そして「月」は永遠の生、不老不死を得た存在として、有限の生を生きる人間にとつての憧憬の対象として、人々の関心を惹きつけるようになったのである。

後者については、日本の古典文学においては、『小町集』がその思想の始まりである。この思想の背景には、仏教の影響が考えられている。シヤカ族には日種と月種があり、それぞれ太陽と月を示している。仏陀が日種であるため、太陽を崇拜し、月を忌むという思想が誕生したと推測されるのである。また、先述の「Etiatic」の語源に関して、人を狂気に導く月の光の神秘性が「月」を妖しく、不気味なものと感じさせることもその理由と考えられるのである。さらに、「月」を「めぐる」思想と同様に、「月」の盈虚に関する理由も挙げられる。盈虚から連想する不老不死から、「月」は人間の生を奪い、死を与える存在であるという考えが生まれるのである。また、盈虚の周期が女性の経事を思わせることから不浄観をも「月」に印象付けるのである。そしてそれは、「死」への回避、「穢れ」への回避願望として「生死」に関して人間の理想が逆説的に示唆されているといえるのである。

従って、古代における「月」はその盈虚の様子や姿から人間の「生と死」を連想させるものであったといえる。それは、憧憬の対象として「めぐる」側面と不吉なものとして「忌む」側面との両義性をもったものでもあったと考えるのである。

二 『竹取物語』における「月」

『竹取物語』における「月」は、かぐや姫の故郷である「月の都」と同義と考えることができる。物語においても、古代における「月」思想と同様に両義的な捕らえ方がされているといえる。

それは、「月」を「忌む」と同時に「月」を理想郷とする見方である。前者については、本文から、かぐや姫を地上の女性と見ることで盈虚から女性の不浄が想起されること、また地上との別れを悲しむ思いにかぐや姫を導いているということ根拠にできる。後者については、「大変美しい」「不老不死」「無憂」の世界であるという「月」の都の世界観が関係している。これは、当時の浄土信仰や中国からの神仙思想の影響が大きく関与していると考えられる。浄土、仙境とは、一切の煩惱や穢れを離れた、清浄な国土、俗界を離れた静かで清浄な土地である。また、第一に死の穢れを黒不浄として嫌う聖地・霊場としての場でもあった。「月」の都はその世界と類似した世界であり、まさに、物語における聖地・霊場であり、当時の人々の理想郷、ユートピアだったのである。

『竹取物語』における「月」の役割とは、第一に「月」によって物語がまとまりもっていることである。かぐや姫の登場、貴公子に出した難問、かぐや姫の変化の人としての姿などを根拠付けるのが「月」なのである。忌む存在としての「月」が、かぐや姫の異種性を肯定するとともに、物語が「月」と地上の二つの世界で繰り上げられることを根拠付けているのである。第二に、「月」の存在が地上の世界と対比されることで、人々の生きる地上の様子を浮き彫りにしていることである。理想郷としての「月」の都が、かぐや姫を通して提示される。そこから、若い、死に、苦悩する「きたなき所」の地上の位相が明らかになるのである。そして、後日談により、「きたなき所」であったとしても、人と人との心の通い合いや思いやりといった「人間らしさ」あふれる地上を肯定し、その地上で生きていくことの尊さをも物語っているように感じるのである。

三 「竹」信仰

『竹取物語』において、「月」と同様に重要な役割を果たすものが「竹」である。「竹」は、イネ科タケ亜科に属する多年生常緑草本植物で、大型のものを総称する。古代より、生活の道具や呪具に用いられてきた植物でもあり、身近で有用なものというイメージを持っている。特に、その成長は特徴的で、一日に一メートル二十センチも丈が伸びるが、稗は一切太くなることはなく、竹一本の寿命はあつても地下茎で繋がる竹林は永遠に生を途絶えさせることがない。

こういった性質を持つ「竹」には、古代より呪的な力を感じ、神聖視するという思想があつた。「竹」と日本人との関係は古く「神代」まで遡る。土器に竹が描かれたり、竹玉（竹管）が際祀具として用いられたりしている。他にも、焼畑、誕生、葬送において「竹」が用いられることが多く、「再生・復活」、「死と再生」といった論理へと通じている。

さらに、「竹」は伝承においても登場することが多い植物である。そこでは「竹」及び竹藪が異界との交渉の場やその世界への入り口として描かれることが多い。「竹」の神秘的な姿や竹藪の薄暗く不気味な様子、成長の特殊性と生命の永遠性といった特徴が、それを助長しているといえるのである。

四 『竹取物語』における「竹」

物語において「竹」が登場するのは、翁がかぐや姫を発見する場面のみである。しかしながら、「竹」が物語に登場するのには理由がある。

第一に、かぐや姫の生まれ変わりの場として選ばれているから

である。かぐや姫は、月の都での罪を償うために流離してきている。そしてその流離は、これまでの自分とは違う自分へと生まれ変わり、新たな人生を歩むという事であると考えられる。「竹」が生命を繰り返すものであることが、生まれ変わり新しい生を生きたという生の繰り返しに重なったといえるのである。

第二に、「竹」がこの世と異界とを結ぶ「境界」として捉えられているからである。二つの世界のはざまには必ず「境界」が存在する。「境界」は妖怪や神が現れる場所として考えられる場であり、竹藪であることが多い。かぐや姫は「竹」という「境界」から地上に現れたと考えることができるのである。

かぐや姫が「竹」から登場したのには、「竹」からの生まれかわりと通り道としての「境界」という二つの理由が考えられた。

さらに、翁の職業が「竹」にまつわる職業であることも同時に「竹」の存在を印象付けているといえる。単に「境界」という通り道と言っただけでなく、物語に登場の必然性を作り出しているといえるだろう。

『竹取物語』が竹にまつわる物語であるのは、当時の思想の中で「竹」が身近で呪的な存在として位置づいてきたことが起因であるといえるだろう。

五 「異界」論

『竹取物語』の世界観を考察するに当たり、「異界」について押さえる必要があると考ええる。月の都、かぐや姫の両者について、それらが異世界であり、異界の住人であることが物語の前提にあるからである。

では、具体的に「異界」とはなんなのだろうか。文化人類学者小松和彦は、「異界とは、私たちの世界、すなわち人々の日常世界・

日常生活の外側にあると考えられている世界・領域のこと」であると定義している。つまり、「異界」は、我々の生きる現実、日常によって存在が具体化されるものであり、対立しているという見方をすれば、わたしたちにとって身近なものなのである。

「異界」を考えるためには、必ず二つの世界が必要である。「竹取物語」における地上と月の都といった、相對する世界があるからこそ、「異界」の概念が成立するのである。具体的に例を挙げるならば、「我々」を現実の世界と考えるならば、「彼ら」は異世界、つまり「異界」ということである。このような二つの存在、世界は、繋がりを持ちつつも、互いの違いを意識し、その存在を肯定しあう関係にある。つまり、「異界」とは、ある特定の世界や存在を概念化するための比較対象としての性格を帯びたものであるといえるのである。「異界」は、現実や「我々」の世界の存在を肯定するために、その輪郭を明確にするために必ず存在する世界であるといえるだろう。

六 『竹取物語』の異界

『竹取物語』における「異界」は、もちろん月の都である。その世界観は地上とは全く異なるものであり、それは地上の人間の理想とする世界観でもあったようである。

月の都の様子としては、かぐや姫と月の都からの使者の言葉ともにて推定することができる。特徴としては、大きく三つ上げることができる。一つ目は、「年をとらない」ということである。不老不死の薬を服用し、永遠の生を手に入れているということが本文から明らかである。そして、それは地上の人間にとっての理想、つまり、老いることや死ぬことへの憂鬱からの解放の世界といえるのである。

この憂鬱からの解放の世界といえる月の都は、「無憂」の世界でもある。これが月の都の特徴の二つ目である。老いる、死ぬといった人間の消えることのない憂鬱のない世界として、月の都はその世界を理想的なものにしているのである。

しかしながら、以上二つの特徴は単に人間の理想を具体化したものではないようである。当時流行の「神仙思想」が大きく影響していると考えられるからである。不老不死の者を仙人とし、「無憂」の世界を仙境とする思想は、当時の社会、人々にとって目指すべき理想郷としての一を確立していたともいえるのである。

最後に、月の都の特徴の三つめとして「穢れなき美しい世界」ということが挙げられる。「月」そのものが、先述のような両義性を持つとともに、不浄を嫌う聖地としての性格と神や仏とも関係する神的な場所として捉えられていることが大きいといえる。

『竹取物語』では、「月の都」と「地上」とが二つの世界として存在し、互いの違いが明確に描かれている。「月の都」は、その性格を持って「地上」の性格を浮き彫りにし、対比されることで「地上」の現実を讀者に実感させる役割を担っているといえるのである。

七 かぐや姫の生い立ち

かぐや姫は、月の都という「異界」の住人である。「異界」の者であるがゆえに、その成長は特徴的なところが多い。

かぐや姫は、翁が毎日仕事場にする竹藪の、「竹」の節の中肩登場する。その姿は三寸ばかりの小さい姿、光に満ちた可愛らしい様子であった。その特徴的な登場については、かぐや姫の異種性をかもし出すだけではなく、その後のストーリーにも影響するものである。第一に、登場の場が「竹」であることについては、「異

界」との経路としての「竹」の性格を連想する。『竹取物語』に「竹」が関係するのは、かぐや姫の登場に必然性を持たせるためであるといふことができるだろう。第二に、かぐや姫が三寸の大きさで登場したことについては、卵生説話との関連が見える。かぐや姫は「竹」の節という小さい空間から登場したことを卵から孵化する鳥になぞらえれば、「再生」ということが連想される。また、物語の後半に登場する羽衣と、その母体である白鳥説話の片鱗を見ることが出来る。第三に、かぐや姫の異常な成長の早さからは、「竹」の成長の早さが連想される。「異界」との経路としての性格のみならず、その成長の特長からも「竹」の物語における役割を見出すことができるだろう。そして、最後第四に、光に満ちた様子で登場したことから、かぐや姫と光の関連性を感じることが出来る。翁の憂鬱を取り払い、男を惹きつける光を持つかぐや姫の霊力的な力、異種としての性格が分かるのである。

かぐや姫の生い立ちに関する内容は、その部分に働くかぐや姫の異種性を助長するだけではなく、『竹取物語』のストーリー展開に対する伏線としてその役割を担っている。

八 かぐや姫

かぐや姫が異種であることは、その故郷や成長、姿から分かることである。特に、かぐや姫を象徴するものとしては、「光」を挙げる事が出来る。登場の場面で竹の中から発した「光」、翁の家を明るく照らすほど美しい姿を示す「光」、そして故郷である月の都の使者が発するまげゆい「光」。そのどれもがかぐや姫を連想させ、その異種性を強調しているように感じるのである。「なよ竹のかぐや姫」という名前からも神格化されたイメージが喚起され、かぐや姫の神異性をも感じさせる。つまり言い換えれば、かぐや

姫は「光」そのものであり、「光」によってその存在が神格化されていったとも考えられるのである。

九 かぐや姫と翁・帝

竹取の翁は、かぐや姫の親としてかぐや姫の成長、生活に大きく関与した人物である。その翁にとつて、かぐや姫は、大事な娘であり、また「変化の人」という神仏的な要素を持つ存在であったようである。かぐや姫は、「月の都」から訪れた「変化の人」として翁に多くの幸運をもたらした。それは富であり、健康あり、翁の人生における幸運そのものであったのだろう。そして、翁にとつてのかぐや姫は単に授かった我が子ではない、ある種の信仰の対象として、自分の命そのものともいえる存在であったと考える。

帝は、かぐや姫への求婚者としてその存在感を出すとともに、かぐや姫の地上における理解者でもあったと考える。前者の求婚者としては、地上の最高権力者、唯一の光明である帝と、光としてのかぐや姫が対等の存在であったことが、他の貴公子からの求婚と根本的に異なっている。直接対面し、やり取りを繰り返すことから分かることである。しかし、それも単に身分が対等であるからできたことではないと考える。それが後者の理解者としてある姿である。かぐや姫を異種であることを認め、かぐや姫の思いを受け入れる帝であったからこそ、かぐや姫との間に心の通い合いを可能にし、対等に接することができたのだろう。

十 求婚と難題

『竹取物語』の中心となる話は、やはり貴公子からの求婚とそ

れに対する難題という難題求婚譚の部分である。大部分を占める内容であるからこそ、物語における役割は大変大きい。そこで、第一に難題とその対象となる品について、第二に難題の役割について考えた。

第一の難題とその対象の品についてであるが、難題の品は、すべて「異界」に由来するものであるということが出来る。天竺にある仏の御石、蓬萊山の玉の枝、唐土の火鼠の皮衣、南海の竜の頸の玉、そして南方に由来する燕の子安貝である。さらに、これらの品は「光」輝くものでもあったようである。まさにかぐや姫に似た特徴を持つ品ばかりなのである。「異界」と「光」というかぐや姫を連想させる品々は、その入手の困難さと合わせ、かぐや姫自身をも象徴するものとして物語に位置づけられているといえる。

第二に、難題の役割についてであるが、かぐや姫にとつての難題は、いくつかの意味を持っていたと考えられる。一つは、貴公子の身分を自分に近づけるためである。「光」として、神格化された存在としてのかぐや姫を娶るには、それと同等もしくはそれ以上の身分なければならぬはずである。かぐや姫が求婚を断るだけではなく、求婚者にチャンスを与えその人格を試しているのは、自分を娶ることで起こる異界との交渉に耐えられるかを確認しているようにも思う。二つ目は、難題がかぐや姫の負った罪をあがなうための手段であったということである。熊野信仰における補陀落信仰では、補陀落渡海といつて宗教の究極の目的である永遠のユートピアを目指す、命がけの実践がある。これは、生前に犯した自己の罪業を消滅し、同時に信者や結縁者の罪、穢れをも背負って自らの命に替えて罪を贖うという宗教性に基づいているという。つまり、『竹取物語』の中においても、難題を通してこの補陀落渡海がなされていたと考えるのである。求婚者たちの「異界」

に由来する品を手に入れるためのたびによって、かぐや姫は自らの罪を贖おうとしたと考えられるのである。

十一 『竹取物語』の羽衣

『竹取物語』において、羽衣はかぐや姫の昇天の場面に登場し、物語を完結させるために不可欠な役割を果たしているものといえるものである。特に物語において、羽衣はそれを羽織ることで「心異になる」という機能を果たす。

月の都は「無憂」の世界であり、「有憂」の地上とは相対する世界である。かぐや姫が月の都に帰還する際に羽衣を身に纏うのは、「異界」に入るための一種の衣装であったと考えている。しかし単なる衣装としてではなく、月の都の住人として「無憂」の世界を生きたるために、思うこと、つまり感情を取り払う機能があつたと考えられるのである。

『風土記』等をみると、羽衣について感情を取り払うという機能のほかに「憂い」の忘却という機能が備わっているように思う。「憂い」という、事実に個々の感情が重なったものを忘却させることで、ある記憶に関する根本的な勘定を完全に断ち切ることができると考えるのである。この羽衣の機能に関しては、『竹取物語』でも同様であると考えられ、物語においては、月の都と地上の違いをさらに浮き彫りにする一つの要因であるといえるのである。

十二 『竹取物語』と不老不死の薬

不老不死とは、老いることがなく、死ぬことがないということである。多くの人が望み、しかし決して叶うことのないであろう事である。

『竹取物語』においては、月の都がこの不老不死の世界であるとされている。しかしながら、「壺なる御くすりたてまつれ。」という月の都からの使者の言葉にもあるように、月の都は不老不死の薬によつてそれを保っているといえるのである。しかしなぜ、月の都は不老不死を保つことが必要なのだろうか。それは、月の都が地上に対する「異界」であり、理想郷であるからである。「けうら」とされる月の都、その住人を理想たらしめるために必要といえるのだ。

かぐや姫は、不老不死の薬を地上に残し、月の都へ帰還する。その意図は、世話になった翁に対する感謝であるといえる。しかし、その思いとは裏腹に不老不死の薬はかぐや姫帰還の後、焼き払われてしまう。理想を焼き捨てたといつても過言ではないこの行為の裏には、別れを悲しみこと、辛さを乗り越えることといった人間にしか味わうことのできない感情や有限の生を行きさることの運命を受け入れた地上の人間の様子が覗かれる。それは、自らの世界を肯定し、理想に生きるのではなく、常に現実と向き合う大切さをも物語っていると考えている。

十三 置き手紙に込められたかぐや姫の思い

物語の中で、異種であるかぐや姫が唯一人間らしさを出すのが、帰還の際に残した置き手紙であるといえる。祖内容は、地上に対する名残惜しさや翁への感謝、帝への愛情など人間として生きたかぐや姫の証であった。

特に、帝へ宛てた手紙からは、求婚を断らなければならぬ運命があつたという事実や、帝をいとおしく思うかぐや姫の心情を読み取れる。異種である自分と人間としていきたい自分の間で葛藤するかぐや姫は、物語の登場人物の中で、最も人間らしい存在

であるように思う。

かぐや姫が残した置き手紙は、物語におけるかぐや姫の心情を物語るだけではなく、『竹取物語』成立の時代やその後の影響についても考える材料になっている。南波浩(注二)によれば、帝に贈った和歌から平安時代の思想の中心となる「あはれ」を感じることができるといふ。紫式部によつて「物語いではじめの祖」と称されるこの『竹取物語』であるが、その片鱗がかぐや姫の置き手紙には表れているのである。

十四 流離という罰

かぐや姫の流離の秘密を探るのが本研究の研究主題である。罪と罰という視点からのアプローチではあるが、実際のところ、その根拠を見つけることは難しい。ヒントは、『竹取物語』におけるかぐや姫の行動や登場人物との関係、そして月の都の世界観および物語の構造である。

はじめに、物語の構造から「三」という数字に着目してみたい。「三」の登場は、かぐや姫の登場と成長の場面、難題求婚の場面及び昇天の場面と複数回登場する。その多くは、月日や時間を制限する意味で用いられている。つまり、「三」がこの『竹取物語』のキーとなる数字であるといえるのである。一つの出来事をターニングポイントに「三」が基準となつて物語が進んでいくとする、かぐや姫が流離する期間さえも制限されていると考えられるのである。

次に着目したいのは、かぐや姫の流離した場所についてである。かぐや姫は、竹取の翁の元に現れ、地上での一時を過ごすことになる。翁の善根がかぐや姫を受け入れる運命を与えたということ、本文より分かることである。しかし、それだけではなく、翁

の仕事にもその決め手があったと考える。翁は「竹」によって生計を立てている身であり、いかなれば「異界」に通じる境界に最も近い存在であるといえるからだ。

また、かぐや姫が過ぎしたのは翁の元、その場は翁の家の中と大変狭く限られている。つまり、かぐや姫は、境界という場おいてある種閉じ込められる形で地上に滞在していたということがができるのである。

かぐや姫の流離は時間及び場の制限から、罪に対する流刑、懲役としての役目があったとすることができる。

最後に、かぐや姫の行動に着目する。特に大きくかぐや姫が関わったことは、なんと言っても求婚に対して難題を出したことである。難題を出すということは、完全なる拒否ではない、それを受けられる可能性を否定しないということである。昇天の際に帝に宛てた手紙からも分かるように、かぐや姫は求婚を本気で拒否してはいないのでないか。

結婚するということは、いかなれば地上、世間の俗にまみれることでもあると考える。家の繁栄のため、幸せのためという意味では、地上の人間にとつて不可欠の要素でもある。しかし、月の都の者にとつては、結婚ほど「穢れ」に値するものはないのではないだろうか。無憂であり、不老不死であり、けうらである世界において、そのすべてに反する結婚は「穢れ」そのものであるといえるのである。

つまり、かぐや姫は結婚という名の「穢れ」から身を守り、貞操を守り通すことが流離における義務であったと考える。光そのものとして地上に降り立ち、異性を惹きつけるかぐや姫だからこそ、月の都の住人であるためのけうらさを守る事が地上での最大の試練であり、罪を果たして帰還するための条件であったと考えている。

十五 「穢れ」という罪

かぐや姫は月の都で何らかの罪を犯している。その事実は、月の都からの使者の言葉からも明確なものであるが、それがどんな罪であるかは分からない。

古代における罪とは、第一に性的タブーの違反、第二に政治的違反であった。流離する皇子として有名な軽の皇子の伝承も、性的タブーに類する罪を扱ったものである。これらのような性的タブーに類する罪は、流刑を持って償われるのが一般的であったと考えられる。他には「祓」によって罪を贖うものも存在しており、特に宗教的な、神聖なものに対する罪を対象としたようである。

かぐや姫が罪を負ったのは、「無憂」の世界である月の都である。感情のない世界における罪について考えると、それは規範に違反すること、つまり慣習や世界の基準を覆しかねない違反を犯したと考えることができる。いわゆる感情に流されず、違反したら罰を受ける、ルール違反である。かぐや姫は、月の都において当然かのように存在する不老不死や「無憂」といった月の都の世界観を揺るがし、また乱すという罪を負ったと考えるのである。

古代における罪とかぐや姫の犯した罪に共通するのは、どちらも人間的な色に染まった罪であるということである。地上の人間のタブー視するもの、月の都の住人が避けるものとして、それらは「穢れ」たものとしての対象であった。そこに足を踏み入れ、そこにまみれた者は「穢れ」の対象として、疎外され、または「祓」ことによって、清浄な身を取り戻さなければならぬのである。

十六 かぐや姫の罪

かぐや姫の犯した罪は、月の都の習慣やその基準を乱す者であ

ると考える。具体的には、かぐや姫の罰の内容とともに考える必要があるだろう。

第一にかぐや姫の受けた罰の一つとして、求婚を断ることを挙げる。求婚を断ることが、地上の俗にまみれることを防ぎ、月の都の住人としてのけうらさを汚さないためであると考えている。

かぐや姫が地上で受けた罰と月の都で犯した罪をあわせて考えると、かぐや姫の犯した罰は月の都で結婚、男女の關係に類するものであったと推測している。月の都が不老不死の世界であることは、それ以上住人が増加することを歓迎するとは考えにくい。つまり、結婚や出産といった男女の關係に類することはタブー視されていたと考えることができるのである。これは、当時ヨケイモノとして疎外された皇子・皇女の存在が影響したと考える。また、子の誕生に際する女性の憂鬱や血に対する「穢れ」のイメージもあわせると、聖地であり理想郷である月の都においてそれらに関する男女の關係は罪であるということができると考えるのである。

かぐや姫は、月の都における罪を地上で果たして帰還する。しかしそこで味わった苦惱は羽衣を羽織ることで消え去ってしまう。つまり、かぐや姫が苦惱することが罰なのではないといえるのである。

かぐや姫は、求婚を断ることを通して、感情があることの辛さ、思いやりのない者の愚かさなどを目の当たりにする。その経験は、羽衣によっても消えることなくかぐや姫の記憶に留まる。そして、月の都に帰還してから、かぐや姫が月の都の貴種として、その世界観を守り基準を乱すことなく生きていく術を学んでいるのではないだろうか。

十七 かぐや姫の罪と罰

『竹取物語』におけるかぐや姫の罪と罰については、第四章で詳述した通りである。罰については、罪に対するものとしての流刑、そしてかぐや姫に月の都の秩序を守るすべてを教えるという意味も含まれていると考える。また罪については、男女の關係に類する問題であるという考えを示してきた。これらは物語の要素として、その中に根付き、私たちの興味を掻き立てるものとなっていると考えている。

しかし、これらの意味するものは、それだけではなく『竹取物語』成立当時の社会に即した意味も含んでいるのではないかと考える。それは、皇族、貴族の実態を示し、さらにその中に存在する罪が多発しないようにするための啓発としての意味である。

『竹取物語』の成立時代は不詳であるが、その時代は平安初期八世紀ころの成立と考えてよいだろう。その時代、後に藤原氏が政権を独裁するようになるが、皇位継承の問題に関して多くの問題を抱える時代であった。その中では、多くの望まれないヨケイモノとしての皇子や皇女が誕生している。それを排出することは、醍醐天皇の子どものように悲劇的な生涯を送る者を増やすことになるのである。

かぐや姫が犯した罪はこの問題を連想する罪でもあったと考える。新しい生命の誕生を歓迎しない月の都におけるタブーは、多くのヨケイモノを排出することを望まない地上の皇族、貴族と類似する。つまり、かぐや姫の罪と罰は、物語における問題だけとしてではなく、当時の社会、特に皇族たちの社会の風刺として、それをモチーフに描かれたのではないだろうか。そして、かぐや姫の示す罪と罰をもって、現実の問題を危惧し、それを啓発する意味があったのではないかと考えるのである。